

茨城県被災地取材③

3月11日に起きた東日本大震災での液状化、津波被害に加えて、東京電力福島原子力発電所事故に関しては日を増すごとに膨大な被害が明らかになってきた。報道でもあるように風評被害は関東全域に広がり、さらに目に見えない放射能への恐怖は私たち保育者にとっても深刻な問題となっている。日頃から各市町村においては放射線量の取り扱いについて検討されているが、今回茨城県民間保育協議会青年部広報委員会では県内各保育園で見られた汚染被害を直接および電話取材し、園庭の除染について事例をまとめた。放射線量は同一園内でも場所や測定方法によって大きく異なるため、単純な比較はできない。よってここでは実際に除染を行った園関係者の話の一例を掲載する。

A 保育園

以前から放射線量を週1回市役所職員が測定しホームページなどで公表してきた。園庭は自然に恵まれ四方に大きな木がたくさんある。日影が多いため夏は涼しく、冬は風が通らない状態となる。その影響もあり保育園全体が大きな吹き溜まりのようになっている。市内でも一番放射線量が高いことを保護者も不安に感じており、自費にて園庭の芝を全て剥ぎ取り、山砂をいれた結果0.1マイクロシーベルトまで下がった。芝剥ぎ取りにかかった総額は、50万円以上とこういうことで負担が大きかった。

B 保育園

原発の爆発事故後、放射線量を市の協力のもと測定してきた。当初は0.19マイクロシーベルト、0.22マイクロシーベルトという数値がほとんどであったが、0.3マイクロシーベルト以上の部分は園長自ら除去作業を行い、除去した砂は園長自宅にて保管していた。8月以降0.33マイクロシーベルト以上の場所は行政負担で除染を行い、汚染された土は土嚢袋に入れ、園庭の端に埋設処理した。これは市役所作成のマニュアルにそった処理方法である。現在は0.1マイクロシーベルトに下がっている。園庭の中でも0.79マイクロシーベルトの場所もあれば、0.11マイクロシーベルトの場所もあり、雨水などの通り道などでは線量が高い場所については今後も速やかな対応を行いたい。

C 保育園

市役所職員による放射線量測定の日、園内・園庭数か所を測定していたところ、園庭の隅にある数本の木で高い数値が検出された。正午に近い時間と言う事もあり「機械が故障している可能性もあるので、午後新しい機械を持参します」と言い残し市職員は保育園を後にした。午後に再度来園した際午前中とは明らかに服装が変わっており長袖、長ズボンを着用していた。別の機械で測定した結果、伐採が必要とのことで、子ども達と小鳥の観察をしていた木を3本伐採せざるを得なかった。市としての今後の方向性や、基準値に対する明確な対応があったわけではなく、費用も自費という事で他の市町村との違いなど戸惑いを感じている。

D 保育園

重機を自ら手配し、休日の早朝より園長以下全職員および保護者が作業を実施した。全ての園庭の表土を5cmはぎ取り、土嚢袋へ。同敷地寺院の普段は使用していない空き地に深さ3m以上の穴を掘り埋設処理した。結果平均で、-0.2 マイクロシーベルト(0.3 マイクロシーベルト→0.15 マイクロシーベルト程度)ほどの効果が見られた。市からは若干の補助があり重機の使用料の一部等にあてた。夏の暑い最中でもあり、大変な労力を要する作業となった。

今回茨城県の全ブロックに取材、電話取材を行なったところ、東京電力福島原子力発電所に近い保育園だから放射能レベルが高いという訳でなく、事故当時の気象状況により、ホットスポットが点在しているようだった。

2012年1月、「放射能汚染に対処する特別措置法に基づく基本方針」が施行され、原発事故に伴う被ばく線量が年1ミリシーベルト以上の地域を国の責任で除染するほか、一定レベル以上の濃度の放射能を帯びた廃棄物や下水汚泥なども国が処理することとなり、これからの除染の方法も統一されるものと思われる。ただ、基準が本当に年1ミリシーベルトでいいのか疑問も残る。

《D 保育園の除染作業の様子》



除染前放射線レベルを測定



手作業で土のう袋につめる



運動場の表土を削る



雨樋の下も高かったため徐染

編集後記

先日ある研修の懇親会の折りに東北のお酒を堪能して改めて日本酒の美味しさに敬意を表し、一日も早い復興を祈りながら楽しい時を過ごしてきました。「礎」も特集号3回を迎え潮来市、大洗町とご紹介してまいりましたが、大きな被害を受けたこの震災を忘れることなく、改めて今後の日本を見据えその将来を担う子ども達を育てる我々ができること、すべき事を考えなくてはならないと感じました。

広報委員 A.O